

## 「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

笑ひ茸笑つてばかりゐられない 斎藤久美子

笑茸は毒きのこ。毒が回ると顔が引き攣つてしまい、それが笑っているように見えるのだとか。決して好きで笑っているわけではない。作者はそのことを十分に承知しながら「笑つてばかりゐられない」と深刻に言う。

宵の秋ひとりの影を濃く歩く 島 昌子

「宵の秋」は秋の宵で、秋の日が暮れてまもない暫くの間。まだ影が残り、その自分の影を踏みながら作者は道を進む。「濃く歩く」の「濃く」は独りである心の重さと心細さがもたらす、自身の歩みの濃度をいつている。

節守れと父の説諭や曼珠沙華 清水 悠太

この句の「節」は志を守ること。志を立てたらそれを一生貫くこと。作者はこの父の言葉をお忘れず今も精進される。それは曼珠沙華の芯の強さにも通ずる。

爛熱くじよんがら熱く夜吹雪 嶋谷 宗泰

じよんがらというと、画家の斎藤真一が描いた雪に埋

もれた世界や越後の瞽女さんを想う。デジタル社会、AIとは対極にある民俗の世界。この句に出てくる爛酒、じよんがら、吹雪は、松永伍一氏の言葉を借りるならば「日本人の中にあつた哀しみの系譜」に連なるものだろう。「熱く」のリフレインが見事。熱気に圧倒された。

落葉流る終の住処を探すまで 首藤 久枝

落葉の行く末を見守る心優しい作者。普通は「落葉かな」で結句するところを、水に流れる落葉を擬人化して「終の住処」を探しに旅立ったと詠む。昔のアニメ「みなしごハッチ」のハッチを見ている気分になった。

冬青草児はすぐ転ぶ母の前 正田 和子

歩くことを覚えた子が母の目の前で何回も転ぶ。でも大丈夫、草の上だから。転ぶという事態が解からないので、その子にはここに笑ったかもしれない。そんなことが想われた。冬青草は冬なお青く枯れ残っている冬草。

新藁を束ねる紐の千切れけり 新海あぐり

刈った稲を稲架に掛け、後日それを脱穀する。残った茎を新藁とも今年藁ともいう。それを干して乾いたら一抱えずつ紐(畳の縁)で結わく。それが藁塚。畳縁は緑色や金色も混じり田圃に行くとよく見掛ける。この句の

「千切れけり」はこの豊縁の経年劣化。或る日とうとう千切れたのである。米作りはこういうことの積み重ね。

誰がために生きてゐるのか夜の長し 菅原 淑子

夜の長い秋だからこそその自問自答。お一人の暮しで病氣もなざつた。これまでいろいろな人に尽くしてきたが今はいろいろの人の助けを受けながら生きておられる。私とは？ 生きるとは？ これは難問である。

退社後の歳暮生きるを称へ合ふ 杉淵真喜子

会社を辞めてからの歳月。かつての仲間とは御歳暮を通じ、年一回消息を確かめ合っている。それを作者は「生きるを称へ合ふ」と詠む。良く頑張っているわね、と。

驕りてはまた照り返す紅葉山 鈴木 智子

紅葉の美しさが際立つ一句。流れてきた雲が一瞬紅葉山を覆い、過ぎ去ると今度は日差しが戻って紅葉山の紅葉がくつきりと。「また照り返す」で景が完成した。

新米の検査に安堵若夫婦 鈴木 藤子

初出荷米の検査である。昨年は各地で猛暑により米の品質が落ち一等米から格下げされた地域もあった。でもこの若夫婦の作った米は合格。「安堵」の二字が眩しい。

誰も彼も志ん生になる年酒かな 高橋 章子

古今亭志ん生が酒を始めたのは十四、五の年から。その頃から賭場に入入りし、勝てばその金で酒を飲んだという筋金入り。結婚した翌日には女郎買いに出了たというから、褒められたものではない。でも、嘶の稽古だけはどんな時でも忘れなかったそうで、「替り目」という嘶では、ぐでんぐでんの酔っ払いを見事に演じている。深夜女房におでんを買いに行かせる場面などは殊に秀逸。掲出句の志ん生もそのようなイメージの志ん生なのだろう。みんな年酒を酌み、ぐだぐだ言っている。

この節の証のやうに葱届く 高橋満利子

葱は一年中買うことが出来るが、やはり鍋の季節は何と言つても葱である。鴨南蛮にももちろん葱が入つていて美味。この時期、町を歩けばみな葱を手に入れている。〈十人のうち九人は葱を持ち 明俊〉という駄句もあるくらいだ。まことに「この節の証」のよう。

柿簾ゆたかに夜の帳降る 高橋美智子

出荷用に簾のごとく柿が吊るされているのは本当に壯観である。家庭でも上階の物干し場に吊しているのをよく見掛ける。その柿簾に日暮が訪れ、やがて「夜の帳」に包まれる。「ゆたかに」は、情感溢れる美しい措辞。

履初めの幼ふんばる大花野 竹森 美喜

靴と言つても柔らかく小さなもの。それを初めて履いた幼児が元気に歩く。踏ん張つて踏ん張つて、とうとう大花野まで。「大花野」で景に広がりが出た。愛孫句か。

秋夕焼いつもの町が名シーン 田中 京

何の変哲もないいつもの町が、あら不思議、秋夕焼が現れただけで映画の一シーンと化した。『三丁目の夕日』などを思い出す。

冬の蝶枯原は君のパレット 寺田 幸子

枯野原をさまよう蝶。作者は愛を籠めて「君」と呼ぶ。枯れ一色の原っぱを、君はどんな色で埋めようとするのか。君のパレットは君だけのもの。

銀杏拾ふ次も次のも視野の中 長井 敦子

ばら撒かれた小銭を拾うような感覚を想像する。この句では落ちているぎんなんを拾うのであるが、拾いつつその先の、またその先のぎんなんに目がいつて、それを「視野の中」と適切に作者は表現した。面白い。

頂に若き棋士立つ空高し 中嶋きよし

藤井聡太棋士の八冠を祝しての一句。棋界の頂点に立

つ若き棋士。「空高し」を座五に置き、彼の更なる飛躍を願う。

穏やかな海の日暮や土瓶蒸し 中村 敬子

日が暮れてからの土瓶蒸しの味や如何に。海は穏やかで何より。心まで穏やかになり、酒も進む。松茸、ハモ、海老、三つ葉、ぎんなん……。出汁がきいて美味しく酸橘の香りもいい。どうしたらこのような暮しが出来るのか。

変声期の少年絶叫愛の羽根 中村 東子

駅前や街頭に整列し「愛の羽根」の寄付を呼び掛ける少年少女たち。作者はその中に声変りしていると思われ少年を発見した。声が低音になつての絶叫というのは野太く、聴いていて解かるのだろう。

息白し独りごちなるスマホ人 中村 幹子

スマホという歩く電話機・ネット端末を持ち歩くスマホびと。寒い街中でそのスマホから白い息が上がるのを作者は見逃さなかつた。スマホも文明の利器なのだろうが、何か一人一人分断させられているようで、私などは怖い。「独りごち」から出る白息を作者も怖いと思つたかもしれない。俳句で現代社会を詠むことも大切。

木枯しに地球を歩く落ちもせず 野沢 慶子

今年は東京に木枯しが吹いた。三年振りである。作者は歩いていて木枯しに吹かれたが、どっこい、吹き飛ばされず地球から落ちなかつたと、そう詠む。面白い着想の一句。落ちたら、富士山に掴まるのも方法。

神さびの日向棚田の田ごと稲架 橋本 恭子

神さびは神々しい様。日向の国の棚田、田毎の月ならぬ「田ごと稲架」の夥しい数の稲架が組まれ、稲が掛けられている。日差しを受ければ黄金色に輝き、「神さび」とはこのことなのだろう。

よそゆきの母に縋る子金木屋 長谷川菊男

「行かないで」と子が母に縋る。よそゆきは余所行き。薄化粧し普段着から別の衣服に着替える。金木屋の匂いがしたその日。子は反射的に、お母さんはどこかへ行ってしまうのだと怯える。哀切極まりない句である。

老木の実が甘かろう小鳥来る 長谷部幸子

老木は人間でいえば後期高齢。「呆け老人」と蔑まれても後期高齢者には長年蓄積した生活の知恵がある。若者とは異なる味わいがある。「老木の実が甘かろう」を私は勝手にそう理解した。老木への労りの一句。

木の葉散る小鳥もときに葉のやうに 畠山 奈於

木の葉がはらはらと突然に散る。それと同じように、小鳥がたいそうな勢いで目の前を落下することがある。この句ではそれを「葉のやうに」と表現している。小鳥も木の葉のようにしなやかに生きている。

箒目を隠す数多の落葉かな 浜田 優子

庭に木の葉がひっきりなしに落ちる。掃き掃除してもいつの間にかたくさん落ちてきて、とうとう箒目まで隠してしまった。この句は箒目に着目したのが良かった。

出稼ぎや出て行く黙と残る黙 原田ミチ子

雪の積もる時期、農山村などでは仕事がなくなり現金収入を求め出稼ぎすることが多々ある。出稼ぎすると春の農作業が始まるまで家を空けることになる。掲出句では出て行く本人とその帰りを待つ家族のそれぞれの黙を詠んでいて身につまされる。出稼ぎの例句を『八戸俳句歳時記』から引く。〈出稼ぎの荷にひそませて母の針 川村静香〉〈出稼ぎの父待つ子等の父の絵よ 三ヶ森秋香〉

アカペラのごとく並びて冬木立 春田 千歳

この冬木立はすでに葉を落した木であろう。目には見えないが、裸木ながらすでに次期に向けた準備が着々と

進められている。さて、この句ではその冬木立がアカペ  
ラ（無伴奏の歌唱）の如く並んでいるとのこと。葉の繁つ  
ている頃にはオーケストラの如く歌っているのだらうが、  
冬木立たちはオーケストラなんか頼らず、文字通り自  
立し、春に向け、腹から声を出して自ら奮い立たせて  
いる。アカペラの比喩を私はそのように受け取った。

にんげんの何してようが鰯雲 平野 豊雄

人間が何をしようが鰯雲には関わりがないこと。  
鰯雲はひたすら満天を泳ぎ、その眼下には人間の様々な  
営みが展開されている。「何してようが」の言い様は極  
めて冷めていて、戦争しようが裏金をキックバックしよ  
うがそれは愚かな人類のすること。この句、「にんげん」  
の平仮名書きがその愚を当て擦っている。

夫は寄鍋われはピフテキ卓割れる 平野 美子

互いの気持ちを付度せず、それぞれが好きなものを食  
べる。小市民であれば互いに寄鍋とピフテキを少しずつ  
分け合い、幸せ気分を共有するところだが、この句では  
お構いなしに我が道を往く。それを是とする家風の様  
である。夫婦が迎合することなく、好きなものを食べら  
れるというのは、究極のところ愛情が濃いということ。

延命はしない約束冬の蜂 本多 遊子

延命措置を取らないというお身内との約束か。近い将  
来そのような事態となった場合を想定しての真摯な約束。  
「冬の蜂」が巧いと思つた。冬の蜂というところ（冬蜂の死  
に所なく歩きけり 村上鬼城）がすぐに思い出される。  
そのイメージの冬の蜂を、作者はお身内の今の境涯の象  
徴として用いている。よく読むと、とても切ない句だ。

鬼瓦目に風花の染みて消え 松本 余一

風花の行方を追っていたら、舞っていた風花が鬼瓦の  
目に着地し、暫くしたら融けて消えたという。堅実な写  
実の句で、風花の本意をよく捉えている。

朝風呂に湯を溢れさせ敬老日 持田きよえ

何の気兼ねもなく朝から風呂に入ることができ、今日  
ばかりは老人（敬老の日を昔は老人の日といった）の天  
国。湯治場でなくても家庭の風呂に朝日でも差せば幸せ  
な気分。湯を溢れさせる贅沢は格別である。

里神楽かの世へ耳目遊ばせて 森尻 禮子

民俗芸能の一つである里神楽。神代の物語に取材した  
劇が多く、人が神に扮装して舞ったり踊ったり、時に笑  
いを振りまいたりもする。神楽は神を迎え、その前で長

命を祈る芸能である。この句の「かの世」は来世であり、作者は耳目を遊ばせながら、里神楽から未来の命というものを感じているのだろう。

冬薔薇 夫とおぼしき星 仰ぐ 八尋 信子

亡夫を偲んでの一句。作者が仰いだ「夫とおぼしき星」は、銀河の中でも一番輝いている星だったに違いない。冬薔薇は勿論、夫に捧げられたもの。

銀杏 は 大粒 日本 大通り 山田 雅子

横浜の日本大通り。ここは銀杏並木が綺麗で、殊に銀杏黄葉が散る様は壮観。道に散った葉が自動車の後を追いかけていく美しい場面を見たこともある。ぎんなんも相当に落ちていたのだろう。作者の発見はそのぎんなんが「大粒」であつたこと。それだけで俳句は成立する。

数へ日の 現実逃避 ゴジラ 観る 横須賀智子

年末は早々とクリスマスソングや「もういくつ寝ると」の歌が流れてきたりして、人々の心を急かす。新しい年を迎えるための用意も多々あり、掲出句のように一時的に現実から逃避したくなる気分はよく解る。逃避といつても映画館やテレビで放映されているゴジラ映画を観ることぐらいで、終ればまた現実に帰るのである。

松の 残生 ねんごろに 菰を 巻く 和田 郁子

松には太いのもあれば細いのもある。高いのもあれば低いものもある。曲がつているものあれば真つ直ぐのものもある。それぞれに応じて菰が巻かれている。巻く位置も異なり、職人たちの技が光る。「松の残生」を汲み、ねんごろに巻かれている。そのことに心を寄せた一句。

初もみぢ 余生 楽しむ こと 揺るる 東 祥子

自身の余生を初紅葉に託す。もつと楽しまなければという思い。紅葉狩にはまだ早いけれど初紅葉に心ときめいた作者は、その紅葉が揺れていることに、紅葉もまた余生を楽しんでいるのだと、そう思ったのだろう。一句全体が余生を楽しんでいるようである。

ムキムキと 育つ 筋肉 春 だから 阿部 草薫

希望なのか、現実なのか。作者なのか、幼子なのか。ムキムキと育った筋肉を目の前にしたの「春だから」の呟きは説得力がある。座五に置いて成功した。

結婚記念日 じつくり 戻す 干し 茸 伊澤やすゑ

時間を掛けてよきご家庭を作ってきた様子が解かる。結婚記念日を迎えてのささやかな感慨が「じつくり戻す干し茸」に集約されている。

語るやうに誘ふやうに薄の穂 市村 啓子

風に揺れる薄の穂からのいざない。「語るやうに」「誘ふやうに」作者の耳目に届いた薄の穂からのメッセージ。心の扉を開きそれを感じ受する作者の姿が目に浮かぶ。

秋の日を大事に仕舞ふ遠き富士 岩根 甲

「大事に仕舞ふ」と感じ表現したところがこの句のよろしき。秋の日が遠富士に落ちて行つたというだけの句は誰でも作れる。俳人の目の鋭さ、柔らかさ。

右往左往の落葉定まる夕間暮れ 牛込はる子

舞い終えた落葉が風に吹かれ翻弄され「右往左往」していたが、夕刻には風も止み、落葉たちはしかるべき所に重なり動かない。「落葉定むる」に表現の工夫がある。

急に冬手をポケットに突つ込み 内海 範子

「突つ込み」の少し乱暴な言葉が、より寒さを伝えている。「急に冬」の唐突な導入も同様だ。秋を飛ばして夏から冬に入ったという今年の異常な気候下での句作。

寒牡丹秘宝咲かする志 大下 壽櫻

菰を被った寒牡丹。蕾のままこれから咲くものも牡丹園には並べられ、好事家には堪えられないこの季節。作

者もまたそうなのだろう、寒牡丹に秘宝としての品格を感じ、秘宝たらんとする寒牡丹の志に期待を寄せる。

音もなく人は老いゆく天の川 太田 裕子

年末に写真アルバムの断捨離をしていて、七十数年間の自分のその時々のかたかたに唾然とした。当り前だが今より若い。心の方も写真のように残っていないけれどやはり若かつただろう。心身の疲弊はこの句のように「音もなく」静かに潜航し、天の川の星々を仰いだ時に浮上して老いを意識する。が、これは哀しいことではない。

店頭に故郷があり柿の山 小河原政子

故郷の柿を町の八百屋の店頭に見つけたのだ。箆の上に沢山盛られた柿は色艶がよく、ここで買わねば女がすたる。重いが家を買って帰つたに違いない。望郷の句。

天高しパリパリ食べる蛸せんべい 小野 直美

蛸をそのままプレスした大きな煎餅を見たことがある。この句の蛸せんべいも「パリパリ」と音をさせて如何にも美味しそう。「天高し」がとても気持ち良い。

農作の品評会や胸に菊 金子かほる

アメリカ映画に『ステートフェア』（一九四五年）が

あつた。ステートフェアは農業の品評会のことで、育てた豚や地産の野菜などを使った料理が品評される。掲出句は日本の品評会。多くの生産者の胸に大輪の菊が輝く。

崖線や上り遠富士下り稲架 金田 知子

崖線は、多摩川などの河川や東京湾の海の浸食作用でできた崖地の連なりで、国分寺・府中・立川など区市町村を超えて連続する緑。崖線下には多くの湧水がある。作者はそこを上る時に富士山、下る時に稲架を見た。「上り遠富士下り稲架」の良き景色が読者の目にも迫る。

熊手持つ手とりんご飴持ちたる手 金田 喜子

西の市に行つて出店のりんご飴を買つてもらつた子。片手には小さな熊手を持ち、もう一つの手にりんご飴を持つ。その両手に注目した可愛らしい句。

星月夜木橋渡れば家明り 菊地 孝枝

木橋が出て来るので作者の故郷のかも知れない。星月夜の下、家路にあるその木橋を渡ると家明りが見えたという。幼い頃の思い出か。懐かしく美しい抒情の一句。

なむあみだ墓石の上に冬の蝶 北 好夫

同じ作品に〈父母の墓人恋ふるかに冬の蝶〉がある。

この墓の上に冬の蝶が懐くように停まつているので、作者は思わず掌を合せ「なむあみだ」と唱えたのだろう。永遠の命を持つ阿弥陀仏に「なむあみだ」と唱えれば極楽へ往生できる。冬の蝶が阿弥陀仏に思えたか。

柿膾夫よるこぶと思ひきや 木山 有衣

柿膾は大根、人參、干し柿（生の柿でもいい）を合わせ酢にませたもので、正月のお節料理として親しまれている。柿を入れることで甘味旨味が出る。この句、柿膾を作ったのだが「夫よるこぶと思ひきや」という結果に。「思ひきや」で終る俳句に初めて接した。面白い。

虎落笛口針噛んで木偶泣きぬ 久保田勝一

志摩の安乗埜には伝承芸能の人形浄瑠璃文楽があり、その芝居小屋を見学したことがある。木偶を保管する木偶小屋もあり、そこに掲出句のような女方の木偶も居たかと思う。人形の口元に口針という釘が打たれていて、歯を食いしばつて泣いたりする時にその釘に着物の袖を引っ掛ける。あらかじめ口針が打たれているところから女性の積年の哀しみがある。虎落笛もまた哀しい。

矢玉尽く落武者の如し曼珠沙華 栗原 季星

見立ての句。曼珠沙華が矢玉の尽きた落武者のようだ

と。「矢玉尽く」がとてもリアルである。そう言えば曼珠沙華も丸腰だし血だらけだ。この見立て、無理がない。

かつがれて葉付大根横断す 小坏あゆみ

この句の大根が担がれて行く場面に驚き、次いで道を「横断す」の措辞に驚いた。葉付大根だから抜いたばかりのものだろう。何人かで担ぐような大きい大根を想像してもいい。難しいことを何も言つてなくて、すーっと胸に飛び込んでくる句である

男等は戦争が好き冬に入る 小泉まり子

この句の「好き」から、モンロー映画の邦題『紳士は金髪がお好き』やテレビCMの「ウィスキーがお好きでしょ」を一瞬思った。勿論、「男等は戦争が好き」は男にはぐつと堪えるものがあつて、痛い所を突かれたという思いがする。冬の時代に逆戻りし、地球はこの先どうなつていくのだろう。

綿虫を追へばふはりととはぐらかす 幸喜美恵子

綿虫を夢中に追う。いずれ見失うだろうと思つていた矢先、やはり何処かへ消え見失つてしまった。この句では、追われている方の綿虫の所作に作者は注目。「ふはりととはぐらかす」は観察の目が行き届いている。

秋刀魚焼く皮のふくふく動くまで 小濱けえ子

秋刀魚をじゅうじゅう焼いている時の様子が事細かに表現されている。電気ではなく昔ながらの炭で焼いているのだろう。町の秋刀魚祭で秋刀魚の煙がもうもうと高く上がつていくのを見たことがあるが、煙の下では掲出句のように秋刀魚の皮がふくふくと動いていたに違いない。「ふくふく」のオノマトペがいい味を出し、見事な焼秋刀魚が完成した。

公家の手とそしられながら年用意 小林ゆきお

青つ白い柔な手をしておられるのか、家では常々皆に「公家の手だ」と誹られているという。お気の毒と申し上げるしかない。家族からすれば、家事は自分たちに任せ、作者にはおとなしくして欲しいが、そう言つてしまえば角が立つので「公家の手」を持ちだしてやいのやいの冷やかしている。そう推測したが如何に。何とも微笑ましい年用意である。

洋梨のどこか子規似や父似とも 小林 玲

洋梨のくびれた所なのだろう。子規の横顔といわれてみれば、然うかとも思う。子規はくだもの好きで書生時代には梨であれば大きいのを六つ七つは食べた。洋梨はまだ無かった。作者の父君も梨がお好きだったので。

全国結社マップ

Vol. 1

東京

代表 守屋明俊

関

拠点／東京、関東 年齢は初めから聴いていないので不明

〇信条

俳句は誰のためでもない、自分のために作る。言葉を大切に、体から湧き出てくるものを感じながら自由闊達に詠む。作品に優劣はあるがその品格に貴賤はない。掲載は、あいうえお順。「歩み入るものに安らぎを」。

〇句会の月例数・場所

「関」月例会を浅草と国分寺市で交互に開催。その他、杉並区、小平市、越谷市などで対面式句会を開催。

〇どういう人に向いているか

俳句を作るのが大好きな人。句作の孤独に耐えられる人。他人と群れることが苦手な人。句の選に一喜一憂しない人。ポストに投函するのが好きな人。

〇代表・同人の句

暑からむいとしこひしの大 阪は 守屋明俊  
黄蝶かな檸檬が空をゆくやうに 寺田幸子  
待宵の中華コースのどんどん来 本多遊子

年会費・二二〇〇円（隔月刊）

〔俳句〕令和5年10月号

第63回全国俳句大会（一般の部）のご案内

▽募集 二句一組（未発表作品。所定の用紙送）又はコピーしたものを使用。何組でも可。  
（選）1月15日より俳人協会ホームページからダウンロードも可能です。  
俳人協会会員以外の一般の方も投句・大会出席出来ます。

▽投句料 二組につき千円（小為替又は現金書留）

▽締切 令和6年4月15日（当日消印有効）

▽送付先 〒100-0001 東京都新宿区百人町3-28-10

▽選者 俳人協会「全国俳句大会」係（電話03-3326-7166）

▽選者 石井いさお 伊藤伊那男 井上 弘美 小井 聖  
今瀬 剛一 上田日差し 大串 卓 今川 軽舟  
小澤 實 栗田やすし 角谷 昌子 加古 宗也  
坂本 宮尾 佐怒賀直美 嶋田 雪江 白濱 一羊  
鈴木しげを 鈴木 達哉 染谷 仲村 智行  
徳田千鶴子 中坪 達哉 野中 亮介 能村 研三  
西村 和子 西山 法弘 藤田 直子 藤本美和子  
墓目 良雨 福永 隆信 松岡 隆子 南 うみを 三村 純也  
村上喜代子 森田純一郎 横澤 放川（五十音順）

▽大会 令和6年9月10日（火）正午開場・午後1時開会（入場無料）  
有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-15-1  
（電話03-3326-7166）

有楽町マリオン11階（JR有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C1出口・地下鉄有楽町駅D7出口）  
社会状況により開催の有無・収容人数等が変わることがあります。  
俳人協会にお問合わせ下さい。

▽賞 Ⅱ大会賞・秀逸賞・各選者の特選賞。

☆大会終了後応募者に入選作品集をお送りします。（お一人5冊まで）

☆応募作品の訂正・取消しには応じられません。

☆類句及び二重投句については、入選を取消すことがあります。

☆入賞作品は、俳人協会ホームページに掲載します。

☆なお、大会当日、参会者より一句を募集し、特選・入選者に賞を呈します（投句締切、午後1時。未発表作品。投句料無料）。

主催 公益社団法人 俳人協会  
後援 朝日新聞社